

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅠ（教員・学生参加型） 2025年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏 名
	福祉学科・3年	濱地美安
指導教員	所属・職名	氏 名
	福祉学科・准教授	掛川直之
研究課題	出所者を受け入れる事業所への聴き取りを通して排除のないコミュニティをデザインする	
研究年度	2025年度	
プロジェクト 分担者	天明千佳、大友佳乃子、二宮愛美、井上真里奈、江崎結、高桑悠香、深澤美鈴	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. プロジェクト内容

本プロジェクトでは、高齢または障害により支援を必要とする出所者を円滑に福祉サービスにつなげることを目的とした埼玉県地域生活定着支援センター等のご協力のもと、埼玉県地域生活定着支援センターがコーディネートを行い、実際に出所者受け入れを行っている福祉施設へのインタビューを通じて支援の経緯や課題を明らかにすることを目的に行われた。

インタビュー調査では、グループホーム、就労継続支援B型事業所、軽費老人ホーム、相談事業所など出所者を受け入れている複数の施設を対象とし、現場職員の方に半構造化インタビューを行った。その後、インタビュー内容の逐語録を作成し、支援の経緯や現場での課題、支援の特徴について整理・分析を行った。

今年度は埼玉県内にある3つの福祉施設の方にインタビュー調査を行った。

2. 本プロジェクトの成果

調査の結果、出所者支援は「出所者」という属性を特別視するのではなく、障害福祉や高齢福祉の側面で捉え支援が行われていることが明らかになった。出所者を特別な対象として扱うのではなく、1人の人として尊重しながら支援を行う姿勢が共通して見られた。また、生活の行き詰まりの解消のための居場所を作り出し、支援やサービスなど多職種による連携が求められていることがわかり、理解を深めることができた。

一方で、支援を進める上では、行政の縦割り構造による情報共有の難しさや、出所者が地域生活へ移行する際の中間的な受け皿の不足といった課題も指摘された。こうした課題に対応するためには、地域生活定着支援センター、保護観察所、行政機関、医療・福祉機関など、多機関の連携とともに、横のつながりが重要であると考えられる。

本プロジェクトを通して、刑事司法領域における社会復帰支援は、司法の枠組みだけでなく、地域福祉の視点から捉えることが重要であることが明らかとなった。また、出所者を「特別な存在」として扱うのではなく、地域の中で支援を必要とする一人の生活者として受け入れることが、排除のないコミュニティの形成につながるということが見えてきた。

なお、本プロジェクトの集大成として2月4日にはご協力いただいた施設の方のご参加のもと、公開研究会を行いこれまでのヒアリングの成果報告を行った。また、2月14日に行われた関東ブロック再犯防止シンポジウムにて本プロジェクトの成果についてパネルの展示を行った。